

写真1 本を寄贈して下さった佐野賢治先生（中央、右が筆者）

歴任した。佐野先生と初めてお会いしたとき、先生は大学院のゼミの最中であつた。先生が時折立ち上がって黒板に「天皇」「国家神道」等のキーワードを書き、学生たちが先生の講義を聞きながら、しきりに記録を取っていた。佐野先生の表情は厳肅だが、声が温和でおごり高ぶらない人格者といった雰囲気である。間もなく授業が終わろうかという時に、先生は私に自己紹介を求め、その後北京師範大学の民俗学の現状について説明を加えられた。佐野先生は幅広い研究を行っている。1980年代から1990年代にかけては、中国雲南省、貴州省、四川省などの地域の少数民族の研究、特に民族衣装・冠婚葬祭・言語文字・トンパ教などに関心を持たれ、さまざまな成果を出された。近年、佐野先生は日本民俗学の原点の研究に改めて焦点を当て、民俗学を“幸福の学”とする考え方を唱えておられる。佐野先生はお忙しいだろうと予想していたため、まさか私の発表会に登場し本を

プレゼントしてくださり、メッセージまでいただいけるとは思わなかつた。とても感動した。

わずか20日間の短い期間の訪問ではあつたが、とても充実した有意義な時間を過ごすことができた。東京のいくつかの博物館を訪れ、大好きな寿司を味わい、さらに、三浦市の小さな漁村を調査しているときに、幸運にも日本の象徴である富士山を見ることができた。この神奈川大学の旅では、日本人の思いやりと温かさに触れ、日本の伝統的な面と現代的な面の両方を見ることができた。そして最後に、地元の方の家に連れて行つてくださり、日本民俗学の中心人物である福田アジオ先生を紹介していただいた小熊先生に感謝したいと思う。小熊先生のおかげでとても勉強になった。横浜にいたときはほとんどが雨で、気温もかなり下がつたが、先生方の博学と知恵、情熱は永遠に心に刻みつけられ、終生忘れることはないだろう。



写真2 遠く眺める富士山

トキワ松学園小学校の俳句授業

デボラ フェルナンデス タバレス
(サンパウロ大学)



この冬の日本滞在中、ある晴れた日に私は東京のトキワ松学園小学校を訪問した。

通訳と私は、校長の栗林明弘先生に温かく迎えられた。俳句の本に囲まれてお茶を飲みながら、私たちは先生が俳句を詠まれること、日本の俳句の協会に所属していることなどを伺った。先生はトキワ松学園小学校の教師や生徒に、俳句を学んで実際に作ることを奨励しているが、俳句作りは今の日本の学校ではあまり行われていないという。この学校の生徒たちは俳句のコンテストにも参加している。先生は、心の内を表現する方

法として生徒たちに創造性を発揮させることの重要性も強調された。俳句作りはそのための場の一つになっている。

私たちは美しい季語カルタの箱入りセットを見せていただいたが、それは教師が遊びを通して俳句を教えるために使うものだった。

短い歓談の後、栗林先生による4年生の俳句の授業が始まった。

樹木や草花に囲まれ、子どもたちが遊ぶための美しい大きな木造の遊具がある広い校庭で、22人の生徒と



担任教師が栗林先生を待っていた。先生が生徒たちに広い校庭を歩き回って冬の季語を探して俳句を作るように言った。紙と鉛筆を持った生徒たちの季語探しが始まった。何人かの生徒と一緒に歩くと、言葉の違いがあるにもかかわらず（私はポルトガル語を話し、彼らは日本語を話す）詩が私たちに迫ってきて、それは芸術が言葉の違いを越えて人間に迫ってくるのに似ていた。

明るくおしゃべりな少年が、オノマトペを極めて独創的に使って冬の葉の音を俳句に詠んだ。これをきっかけに他の生徒たちも自分の作った句を私たちに見せに来てくれ、私は彼らにどんな季語を選んだのか尋ねた。すると彼らは広い校庭を走り回って様々な季語を教えてくださいました。果実、植物、昆虫、冷たい風、恥ずかしそうに雲に隠れる冬の日……。私は短い時間で季語を見つける彼らの知覚と感受性に驚いた。生き生きとした彼らの瞳がごく自然に対象を捉える様子に、私は以前教えていたブラジルの4年生たちを思い出し、どこの国でも幼い俳人たちは本当に素晴らしい、それは国や文化や社会的立場には関係がない、と心から思った。

校庭での俳句作りが終わると私たちは4年生の教室に向かった。学校の廊下は子どもたちの作品で彩られていた。壁に貼られた美しい絵画は創造性と優しきで学校の雰囲気をつまみかきものにしていた。その光景は、日本の都市によく見られる灰色や茶色のビルとは対照的だった。色彩豊かな学校は生徒たちの喜びの表情をそのまま反映していた。

教室では栗林先生が生徒たちの俳句を1句ずつ分析していった。先生は生徒一人一人に、とても優しく、ここはこう変えたらいいんじゃないかと提案した。生徒たちは自分の机に戻って俳句を書き直し、それが終わると全員が自分の句を黒板に書いた。白いチョークで縦書きされた22句は、まるで一つの美しい芸術作品のようだった。

続いて栗林先生の総評があり、先生はそれぞれの句の最も面白く独創的な部分に黄色いチョークで線を引いた。私はこの行為に深い感銘を受けた。励ましと創造性がこの俳句の授業のキーワードであり、それを知るとは日本の俳句を研究する私にとって非常に良い経験となった。

栗林先生による4年生の俳句の授業が行われるのは1学期に1度だけであるが、この日の授業の最後に10歳の生徒たちの1人から特別なリクエストが出された。「先生、先生の俳句の授業をもっと増やしてください」と。

Débora Fernandes Tavares
ブラジル サンパウロ大学
日本語・日本文学・日本文学修士
ブラジルの俳諧と日本の俳句を研究



写真1 栗林明弘校長とトキワ松学園にて



写真2 子どもたちが俳句を練習するための季語カルタ

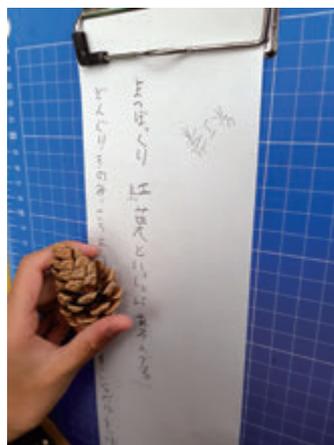


写真3 トキワ松学園小学校の子どもの俳句



写真4 子どもたちが俳句の授業で作った俳句